北海道経済部小田桐観光振興監インタビュー

小田桐 観光振興監

昭和55年生まれ／平成16年北大文学部卒業
同年国土交通省入省
平成27年北海道総合政策部航空局航空課長
令和4年国土交通省総合政策局情報政策課企画官（DX担当）
令和5年北海道経済部次長兼観光局観光誘客担当局長
令和6年北海道経済部観光振興監

岩尾専務）

本日はお忙しい中貴重なお時間をいただきありがとうございます。雪に恵まれスノースポーツの盛んな北海道ですが、本題に入る前に、道における観光の位置づけ、動向などはいかがでしょうか。

小田桐観光振興監）

北海道は、農業や水産業など一次産業が盛んですが、政府が観光立国に舵を切って以来、インバウンドを中心に来道者は増加しており、コロナ禍で一時的に観光客は減少したものの、観光産業は、近年成長が著しい分野です。気候は、四季がはっきりしており、冬はたくさんの雪に覆われます。そのためか、相対的に東南アジアの方が多く訪れていただいています。雪に触れてみたいということでしょうね。コロナ禍の後は、欧米の方が増えてきています。北海道の自然や食に関心があるようです。

岩尾専務）

観光振興への取り組みはいかがでしょうか

小田桐観光振興監）

観光は裾野が広く、地域経済に与える影響が大きいと考えています。道では、観光の高付加価値化を目指しています。昨年9月、アドベンチャートラベル・ワールドサミットを開催しました。この経験を活かし、高付加価値の観光商品開発を目指しています。受入れ体制の強化、そのためには人材の育成が欠かせません。また、道内は広いですから移動の利便性の向上も欠かせません。周遊観光の円滑化のためにも二次交通の利便性向上が必要です。海外へのプロモーションにも力を入れています。北海道はその気象条件から世界最高水準のパウダースノーを有しており、これは強みですね。道では、北海道観光の振興のため、「北海道観光の高付加価値化」、「受入体制整備の再構築」、「戦略的なプロモーション活動」などに、所要の予算を計上しています。

岩尾専務）

冬の観光はいかがでしょうか

小田桐観光振興監）

冬の最大のイベントは「さっぽろ雪まつり」でしょうね。今年は、約240万人が訪れました。
他にも、小樽の運河や線路の跡地などの街並みをろうそくの灯りで点す「小樽雪あかりの路」、層雲峡の氷瀑まつりなどが代表的なイベントです。オホーツク地域では流氷観光も盛んです。
それも、砕氷船に乗るだけではなく、ドライスーツを着用しガイドの案内で流氷の上を歩く「流氷ウォーク」も人気が高まっています。

岩尾専務）

私事ですが、私は小学生時代稚内で育ちました。当時は稚内も流氷で覆われていましたが、落ちたら命はありませんから流氷で遊ぶ子供はいませんでした。かつては歩いて樺太（サハリン）まで行けたという話も聞いたことがあります。

小田桐観光振興監）

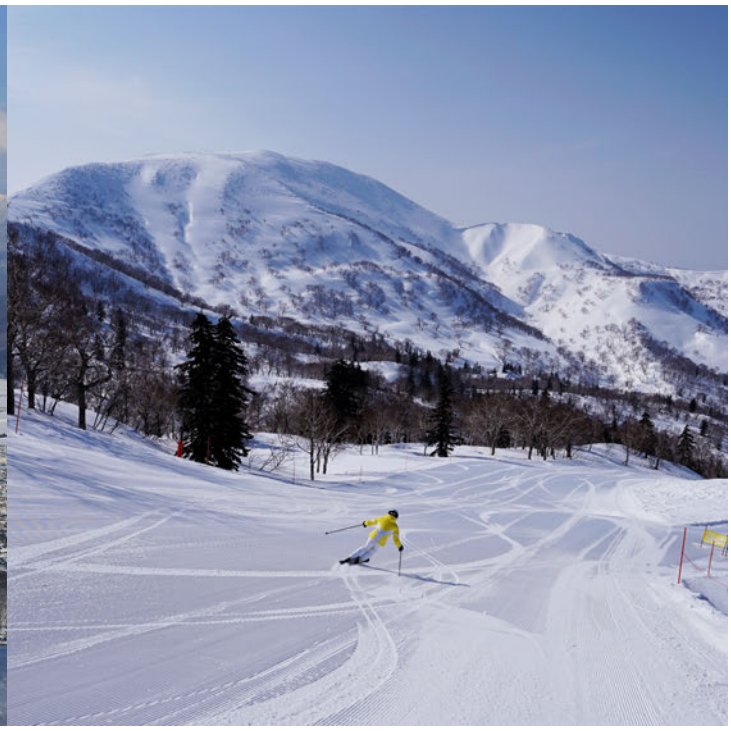
各地で様々な取り組みが行われていますが、情報の発信力が課題です。そのため北海道観光機構が中心となり道外、海外へのプロモーションを進めています。また、航空会社との連携も大事です。航空課長を担当していた際には、国際線の誘致活動に奔走していました。北海道は広く様々な観光資源がありますから、全道というだけではなく、道東、道南などのブロックごとの広域的な取り組みも重層的に盛んに行われています。

岩尾専務）

そろそろ本題に入らせていただきます。冬と言えば雪でしょう。雪を活用したスノースポーツやスキー場の話に入らせていただきます。スキー場の数や特徴はいかがでしょうか。

小田桐観光振興監）

スキー場は道内に百近くあると思います。ニセコのような世界的に有名なスノーリゾートから小規模な住民のためのスキー場まで様々です。道民に定着しているスノースポーツですが、貴重な観光資源でもあります。北海道も近年、温暖化による気候変動の影響は受けていますが、11月から3月ぐらいまで、スキー場は豊富な雪に覆われており特に厳寒期は雪質の良いパウダースノーが楽しめます。



岩尾専務）

道民の健康づくりと観光資源ということですね。観光という点での取り組みはいかがでしょうか。

小田桐観光振興監）

道では「スキープロモーション協議会」に参加し、関係機関と連携しPRに努めています。また、昨年、「アドベンチャートラベルガイド認定制度」を創設し、その中に「バックカントリースキーガイド」の区分を設けるなどして、質の高い人材の育成を図っています。

岩尾専務）

我々スノー関係者の間では、円安でもありますし、特にインバウンドの方に対し、サービスの価値に見合った料金を設定することを目指しています。日本人の負担能力を考えるとリフト料金などは一律の大幅値上げは難しいですが、英語のガイドなどは特殊技能にも入りますから、アドベンチャートラベルガイドの資格を取得した方がインバウンドの方から適切な料金をいただけるようになることが望ましいと思います。ところで、先ほどもお話にありましたが、東南アジアなどから雪を見るために来る方も多いとのことです。この方々にスキーやスノーボードを体験していただき興味を持っていただければリピーターになります。

小田桐観光振興監）

その通りでしょう。ただ、スキーやスノーボードが前面に出たのでは敷居が高すぎます。例えば、一般的な観光周遊ルートの中のアクティビティの一つとして、スキーやスノーボードの体験も組み込むことが考えられると思います。このような場合には、初心者、未経験者ですからニセコや富良野のような大規模なスキーリゾートである必要はありません。英語や中国語の受入れ体制があればどこのスキー場でもよいはずです。行き先を多くの地域に拡散できます。周遊ツアーを造成する旅行会社との連携がカギだと思います。

岩尾専務）

我々もインバウンドの受入れ体制の整備は喫緊の課題ととらえています。未経験者にとっては、仮にスキー場に行きスキーに興味を持ったとしても、用具のレンタルの仕方、スキーのはき方、どこに行けば教えてもらえるのか、相当にハードルが高いです。そのため、スキー場ごとにスキーのレンタルやスキースクールでの受入れ体制作りなどをお願いしていますが、意欲的なところとそうではないところの温度差があります。仮に、意欲的なところと旅行会社をつなぐことができれば、受け入れ側も確実な数の客が見込めますので、体制整備も進むと思います。
道の方でモデルケースとして成功事例を作っていただければ、他のスキー場もまねをして広がってゆくのではないでしょうか。スキー関係者のみならず、旅行会社、インバウンド、全ての皆さんにとってメリットがあると思います。
ところで、積極的な観光促進のほかに、オーバーツーリズム対策などの点から各地で宿泊税が検討されています。すでに導入されているところもあります。道庁でも宿泊税を検討されていると承知しています。お聞かせください。

小田桐観光振興監）

北海道では、コロナ禍で中断していた観光振興を目的とした新税に関する検討を昨年8月に再開し、本年4月に有識者懇談会の「議論のまとめ」を公表しました。宿泊税については、道内では倶知安町がすでに導入し、ニセコ町でも11月から施行されます。現在、道と10数か所の市町村で検討を進めており、道と市町村の役割分担や税の負担水準などの詰めの検討を行っています。先ほどお話ししましたが、道の役割として、高付加価値化を目指しながら、広域観光の促進、二次交通の利便性向上等の取組を強化していくためには、旅行者の皆様にご負担をいただきながら安定的な財源を確保していく必要があります。また、観光分野は災害などのリスクや影響を受けやすいため、危機対応力の強化も必要です。なお、税率のあり方について、全道で適用される道税について、定率制とすることには事業者の事務負担が大きいというご意見を多くいただいており、段階的な定額制で検討を進めています。

岩尾専務）

ありがとうございます。最後に国民の休日としての「雪の日」制定運動についてお話しさせてください。「雪」は気候変動の影響を大きく受けます。アルプスでは低いところでは氷河も解けてしまい、スキー場は標高の高いところ以外は既に人工雪になっていると聞いています。日本ではまだあまり知られていないようですが、日本の自然雪は世界的にも増々貴重なものとなっており、観光資源にもなっています。雪は保水力もありますので環境保全上も大切です。雪が豊富な北海道では雪は邪魔者という意識もまだまだ強いと思いますが、本州では、特に西のほうでは雪が降らず、気温が高ければ人工降雪機が使えません（雨になります）ので、廃業が相次いでいます。「雪」を通して環境のことを考える日があってもよいのではないか、ということで、協議会として「雪の日」制定運動を盛り上げてゆきたいと考えています。
よろしくお願いします。本日はありがとうございました。